

バリアフリー基本構想に基づいた調査報告について

Survey Report Based on Barrier-Free Basic Concept in Odate

大根 律 久 *1

OHNE Norihisa

要約 秋田職業能力開発短期大学校（以下「秋田短大校」）のある秋田県の北部に位置する大館市の人口の推移は、この 5 年間で総人口が 5,412 人減少する一方で 65 歳以上の高齢者人口が 5,776 人増加しているとの結果が国勢調査より明らかになっている。そこで、本稿では町全体における高齢化の進行、少子化、若者の地元離れの問題を紐解き、大館市が策定したバリアフリーマスタープランに従い、秋田短大校住居環境科の学生が調査、提案をした誰もが安全安心に暮らせる町のありかたについて、大館市と協力して既存の公共施設を中心にバリアフリー調査を実施して、誰もが使いやすい改善案を大館市バリアフリーまちづくり推進協議会にて発表するに至った経過を報告する。

1 はじめに

2021 年 4 月、秋田短大校のある秋田県北部の大館市の駅周辺は、物静かという印象をもつ一方で、賑わいもなく、閑散とした様子に驚きを感じた。大館市はかつては伝統産業である秋田杉による工芸品（曲げわっぱ）や鉱山のまちとして栄えたが昭和 35 年（103,000 人）を境に減少しており、2022 年には 70,000 人を割る見込みとなっている。さらに人口調査の詳細データとなる 2017 年を起点に 5 年間の人口増減について項目別比較をすると図 1 のようになる。

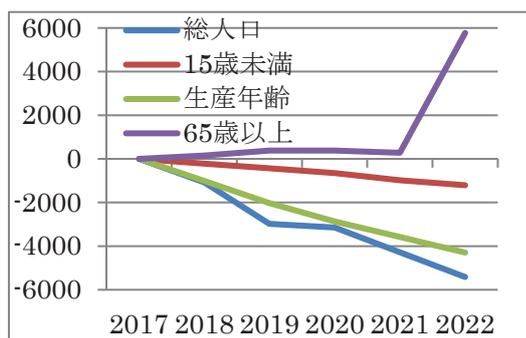


図 1 大館市における人口増減表

図 1 を見てわかるように、総人口、生産年齢人口、15 歳未満人口は軒並み減少の傾向が明らかになる一方で、65 歳以上の高齢者人口が増加の傾向にあることがわかった。町の発展はおろか、町が荒んでいくことに市外や寮内に住む学生も将来町はどうなってしまうのだろうかと感じていたようであった。そこで、この現

状を問題視して、秋田短大校の学生が若者目線で感じ取れる町の現状を把握して、誰もが住みやすい環境を実現するために提案できる機会を求めて、大館市建設部を訪問することとなった。大館市からは、住みやすい街づくりを推進している途上であり御成町地区をはじめとする駅周辺地区は、その重点地区として計画されているとの説明であった。そこで、我々は、現存する公共施設の現状を調査することにより学生の目線で高齢者、身体障害者、子供をはじめすべての人が集いやすいものになっているのかを大館市から提供された資料と、秋田県さらには近県の条例をもとに調査を進めることとなった。

2 調査対象となる公共施設の提供

初年度については、大館市都市計画課より公共施設（比内公民館、秋田犬の里、秋田短大校の 3 施設）を調査対象とすることを提案された。比内公民館は市で行っている扇田地区まち歩き点検の対象地区内にあり、老若男女問わず幅広く利用されている施設であり、地区の要でもある。しかしながら昭和 30 年の開設以降平成 20 年に一部増改築が行われているとはいえ、今の市民生活にそぐわない面もあった。

秋田犬の里は、2019 年に開館した大館駅と隣接する建物で今回の調査では、大館駅の合築目的で近未来的に市の中心施設として活用されることを目論まれ、観光施設の中心としての役割を担う施設として、調査対象施設となった。最後に秋田短大校は開校 30 周年にあ

*1 住居環境科 Department of Housing environment

たる建物で先述の2施設の間中に位置する場所であり、主に学生中心とする若者の使用と一般市民への開放を意図し、その使いやすさについて検討することとなった。最初に行ったことは、学生による調査方法についての検討や、各施設の設計図書によってプランニングの特徴や寸法把握、仕上げを確認するとともに、秋田県バリアフリー社会の形成に関する条例を参考に調査チェックリストを作成することとなった。(表1)

表1 調査チェックリスト

施設訪問調査			
建築物検査専門機関調査標準チェックリスト			
施設名：大館市立中央公民館 9月 2日 (木)			
施設種	チェック項目	判定	備考
廊下等	幅は180cm以上ある	×	170cmだった
	奥壁は薄りなく仕上げられている	○	
	乗降ブロック等が設置されている	×	
	視覚障害者の通行の支障になるものがない	○	
	視覚障害者を適切に誘導しているか	×	誘導板がない
声	50mごとに高い音が聴取可能な場所がある	○	聴取は容易にできた
	アルコーブを適切に設けている	△	外壁面の危険な場所があった
階段	取柄は水平部分を設けている	○	
	幅が140cm以上ある	○	
	段上げが16cm以下である	○	
	段幅が90cm以上ある	×	126cmだった
	段間に手すりがある	×	片側にのみ手すりがあった
	段が識別しやすく、つまずきにくい	○	
	奥壁は薄りなく仕上げられている	○	
	乗降ブロック等が設置されている	×	
主な階段が閉鎖されていない	○		

※一部抜粋

3 調査結果とその改善提案について

令和3年9月に実施された市民による扇田地区まち歩き点検の際、秋田短大校で実施した調査の報告を行った。比内公民館については、バリアフリー調査結果と施設の使われ方の問題提起を行った。まずは、平成20年に増改築された部分の一部として、車いす利用者のエレベータ利用に関する検証(図2)及びシミュレーション(図3)、公民館へのアクセスとバス利用者の問題点(上り線のバス停からのアクセスのための表示や雪に対する対策についての指摘)を提起した。

4. 安全、安心な暮らしをするために

この向きで乗車するの？



図2 街歩き点検資料(一部)

また、その対策について車いす利用者の使用手順や安全な利用方法を示した。また、雪道による横断方法については歩者分離の改善案を提案した。

4. 安全、安心な暮らしをするために

1. 使用者の目線で考える。
- ① エレベーターへ真っすぐ向かう
- ② ボタンを押す
- ③ 扉があく
- ④ 真っすぐ乗る
- ⑤ 行先ボタンを押す
- ⑥ 鏡を見ながら扉があくのを確認
- ⑦ 扉があくと同時に鏡を見ながら後ろ向きで移動する。
- ⑧ 行先のエレベーターホールで回転し移動する。

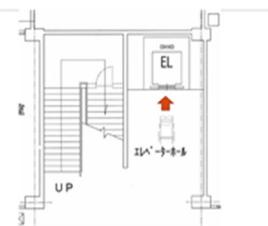


図3 街歩き点検資料(一部)

秋田犬の里の調査においては、新型コロナ対策として、入口に検温とアルコール消毒エリアが設けられていたが、高さの想定が大人用であり、車いす利用者、子供の利用が困難であることから台座の活用を指摘した。また、今後訪れるインバウンドによる外国人利用者への配慮を指摘した。(提案として二次元バーコードによる英語音声案内の設置)秋田短大校についてはエレベータ内の鏡の大きさ(車いす利用時に足元が確認できない)、交通標識の位置変更、障害者駐車場の表示等に問題があったことから、鏡を下部に広げるように新たに設置するように変更、さらに駐車場等の表示を変更したことを報告した。なお、これらの調査結果に基づく改善及び提案並びに改善結果を集約し、大館市都市計画課へ提出した。また、3施設の調査結果と今後の改善提案を添えて、大館市都市計画課にてプレゼンテーションを行った。

4 重点地区の公共施設調査の実施

市が策定した大館市バリアフリー基本構想(以下「バリアフリー基本構想」)をきっかけに、取り組みの重点地区が選定された。これを機会に大館市都市計画課より重点整備地区内(大館駅周辺地区・大館市役所周辺地区)の公共施設の調査を共同で行うことを提案されて、総合制作実習のテーマとして調査を行うことになった。なお、バリアフリー基本構想の中では、民間事業所がバリアフリー改修を行う際は補助金対象となっているが、令和4年度については前段調査として、公共4施設(大館市民会館、大館公民館、大館市三の丸庁舎、大館公共職業安定所)が調査対象施設となった。調査についてはバリアフリー基本構想の基本とするバリアフリー法(旧ハートビル法)と秋田県バリアフリー社会の形成に関する条例、併せて定量的に評価しやすい「岩手県ひとにやさしいまちづくり条例」を活用して調査

票を作成した。

また、これに合わせて市民に向けてアンケート調査を市や調査対象施設の協力のもと実施して、施設の不便さや生活面も含めた改善が必要と思われるところ、要望するところを集計して活用した。(図4)



図4 アンケート結果集計

これらの結果をもとに1つ目の調査対象施設である大館市民会館を取り上げる。この施設は市内の文化施設として広く活用されて全国のアーティストのコンサートや著名人の講演会で利用される施設である。バリアフリー対策はされているが、スロープ幅や多目的トイレの利用に難があることを指摘した。(付属品の設置位置を変更することにより改善できることを提案した。)(図5)



図5 大館市民会館の調査

2つ目の大館公民館は、以前福祉会館として市民に広く利用されていて、現在も定期的な集会や市民向けイベントが開催されている。施設は、様々な障害を抱えている者も含め、幅広い年齢層が利用している。福祉施設としての名残から広い通路や適正な手すりの配置は見られたが、視覚障害者への配慮(案内表示、誘導

表示の不備)や、トイレをはじめとする出入り口扉の不便さを指摘した。前者においてはブロックや誘導灯、足元灯の設置をすること、後者では段差解消のためのレール溝の排除と重さ軽減のためのハンガードアへの改修を提案した。(図6)



図6 大館公民館の調査風景

3つ目の調査対象施設である大館市三の丸庁舎は、観光課等一部機能が入っている施設であるが、建築物自体が40年を経過しており、外壁のクラックやタイル部分のエフロレッセンスもみられるために全体として補修が必要とされる建物である。アプローチの階段幅や床面の劣化、廊下幅等の改善箇所が多くみられていた。今後は、取り壊しも検討されていることも鑑みて予算が充てられない状態であるため、一部市民が利用するのに支障のない程度で提案を行った。(階段タイルをノンスリップ加工のものに改修することや通路上の収納をできるだけ置かず通路外に設置する案等)(図7)

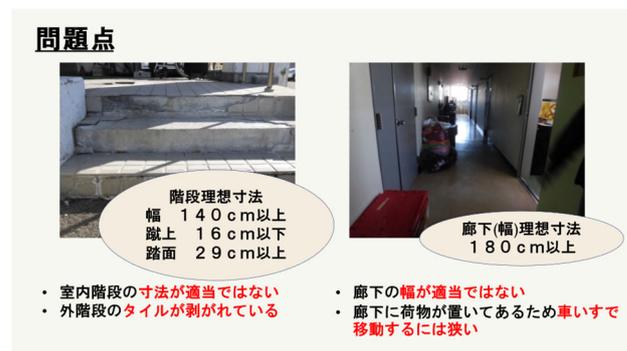


図7 三の丸庁舎の調査

最後に調査を実施したのは大館公共職業安定所である。この施設は、不特定多数の方が利用されることが想定されており、概ね指摘する箇所もなかった。一部スロープのタイルが欠けている箇所が見られたが、安

全上の改善が必要なものではなかった。しかし、トイレ表示を塞ぐように防犯カメラが設置されており、設置場所の移動の指摘を行った。(図8)



図8 大館公共職業安定所の調査箇所

5 調査報告のまとめと大館市での発表

大館市都市計画課より大館市の主催として開催される『大館市バリアフリーまちづくり推進協議会』にて、大館市との共同調査として成果発表を依頼された。大学生の参加としては東北大学公共政策大学院、秋田短大校であった。夏に東北大学公共政策大学院がワークショップを兼ねて成果報告をし、秋田短大校は令和5年2月3日(金)に開催された協議会において成果報告をした。また、秋田短大の学生による提言についての記事が地元北鹿新聞に掲載された。(図9) 特に市民に向けての心のバリアフリーの大切さや市内公共交通『mobi』の本格運行による老若男女の隔たりのない利便性の提言に加えて、イベント開催時のバスの運行計画等については、協議会委員の関心が特に高かった。さらに、令和5年2月8日(水)に行われた大館ポリテックビジョンにおいて総合制作実習における成果報告としてプレゼンテーションを行った。



図9 北鹿新聞の掲載記事

6 まとめ

冒頭の調査結果からわかるように、大館市の少子高齢化による将来の安全・安心な暮らしが脅かされると予想された。そのような状況の中、秋田短大の学生と総合制作実習において、不特定多数の市民が利用する公共施設の調査を地道に取り組むことができた。また、若者の目線で指摘、改善提案を取り入れて推進協議会にて報告し、委員に一定の理解を得ることができたことは、バリアフリー基本構想の理念に合致して、その成果が大きな期待となっていることの表れであることが認識できた。ただし、これだけでは大きな改革にはならず、雪に対するインフラの整備、物流および医療や交通手段(遠隔やIoT《ウェアラブルデバイス等》の活用)によって市民生活が大きく変わるような街づくりが今後期待される場所である。特に大館市内には秋田自動車道路と東北自動車道路の分岐点にあたるインターチェンジが多く存在し、その周辺の広大な開けた土地の活用等、利点を活かして生活物資の集約地としてロジスティクスプラットホームの役割や『スーパーシティ構想』へと繋がると思われる。

謝辞

この調査に際して多大なるご協力を頂いた大館市建設部都市計画課をはじめ公共施設の管理担当各位並びにこの調査に真摯に取り組んでくれた秋田短大校の学生諸君に感謝を申し上げます。

参考文献

- 1) 生活.com 国勢調査資料
- 2) 大館市バリアフリーマスタープラン移動等円滑化促進方針(令和3年3月版)
- 3) 大館市バリアフリー基本構想(令和4年3月版)